

胃痛における中脘穴の考え方

■胃痛に中脘をよく取穴する理由

中脘は臍の上4寸に位置し、穴下には胃の幽門部があり、胃の募穴、六腑の会穴、中焦の気会穴とされている。胃や上腹部、中焦の気機失調を主治したり、病理上で胃と関連する病証を主治することができる。瀉法を施すと和胃散滯、理気和胃、去痰消積といった作用があり、これに灸または焼山火を併用すると暖胃逐邪、温通腑気、温胃散寒といった作用がある。

六腑は通を以て順とされ。瀉して藏さずという生理的な特徴がある。胃は降を以て和とし、和と降を喜ぶとされている。胃痛の病位は胃にあるわけだが、胃気失和、気機不利となり、それに経絡の阻滯や気血の阻滯がからんで胃痛が起こるのである。このことから中脘は胃痛を治療する常用穴とされているのである。

寒邪犯胃、飲食停滯、肝気鬱滯などにより気機不利になると痛みが起こるようになる。また脾胃虚寒による胃絡の温煦失調、または胃陰不足による胃絡失養によって脈絡が拘急すると痛みが起こるようになる。肝鬱化火となりこの熱が胃絡を焼灼したり、あるいは気滯が長期化して瘀血内結となると痛みが起こるようになる。上記の全ての場合に、中脘を配穴することができ、病証に応じて瀉法を施したり、灸瀉を施すことができる。

このような場合、決して補法を施してはならないのである。これが中脘に瀉法または灸瀉がよく用いられる理由である。

例、

1. 温中暖胃、散寒止痛の処方中に中脘（灸瀉）を用いると、暖胃散寒により止痛をはかることができる。
2. 疏肝理気、和胃止痛の処方中に中脘（瀉）を配穴すると、理気和胃により止痛をはかることができる。
3. 消食導滯、和胃止痛の処方中に中脘（瀉）を配穴すると、消積和胃により止痛をはかることができる。
4. 温中健脾、散寒止痛の処方中に中脘（灸瀉）を配穴すると、温胃散寒により止痛をはかることができる。
5. 疏肝瀉熱、清胃調中の処方中に中脘（瀉）を配穴すると、和胃調中により止痛をはかることができる。
6. 活血去瘀、理気止痛の処方中に中脘（瀉）を用いると、佐として理気和胃により止痛をはかることができる。
7. 健脾益気、補中和胃の処方中に中脘（瀉）を用いると、佐として和胃調中をはかることにより止痛をはかることができる。

■胃痛に対する鍼灸治療

①寒邪犯胃(お腹を冷やしてお腹が痛くなった)

【主証】急性の胃脘痛、さむがりて暖をとりたがる。温めると痛みは軽減する。熱飲を好む。舌苔は薄白、脈は弦緊となる。

【治則】温中暖胃、散寒止痛

【取穴】軽症：中脘（灸瀉重症：中脘、上脘（灸瀉）：温中暖胃、散寒止痛

[応用]

◇胸脘痞悶、食欲不振、噯気などを伴う場合は気滯がからんでいる。中脘、上脘（灸瀉）、間使または内関（瀉）により温中暖胃、理気止痛をはかるとよい。

◇寒邪犯胃に食滯を伴っている場合は、中脘、上脘（灸瀉）、足三里（瀉）により温中暖胃、消食導滯をはかるとよい。

②飲食停滯(脾胃に食物が滞っている)

【主証】胃脘痛，上腹部脹満，吞酸，噯腐，食欲不振といった症状を伴う，食後に痛みは増強する，大便がスッキリ出ない，または未消化物（酸腐臭物）を嘔吐する。吐いた後に痛みは軽減する。舌苔は厚膩，脈は滑または濡滑または弦滑となる。

【治則】消食導滯，和胃止痛

【取穴】中脘，足三里（瀉），四縫穴（点刺）

【応用】

◇激しい胃痛発作時には四縫穴を除き，公孫（瀉）を加えて消食導滯，和胃止痛の増強をはかるとよい。

◇食積が鬱して化熱し，胃病があって舌苔黄で便秘を伴うものには，中脘，足三里，天枢（瀉）により通腑攻下をはかって止痛するとよい。

③肝気犯胃(ストレスから起こった胃痛)

【主証】胃脘部の脹痛，痛みは両脇部におよぶ。頻繁に噯気がでる。大便不暢，噯気や失気後に痛みは緩解する。情志の変化により発病したり増悪する。舌苔は薄白，脈は沈弦となる。

【治則】疏肝理気，和胃止痛

【取穴】

◇太衝，内関，中脘または足三里（瀉）

太衝，内関により疏肝理気をはかって，その因を治す。

◇中脘，足三里，間使（瀉）

中脘または足三里を配穴して和胃止痛をはかり，その果を治す。あるいは中脘，足三里，間使により行気と胃，暢中止痛をはかる。

【応用】

◇酸水を吐き，ときどき嘈雜〔胸やけ〕が起こるものには，陰陵泉（瀉）を加えて去湿をはかるとよい。

◇長期にわたって改善しなかったり，行気散滯の作用をもつ薬物を長期にわたって服用して正気を損傷して，息切れ，無力感，精神不振を伴うものには，先に合谷（補）により補気をはかり，次に内関，足三里または中脘（瀉）により理気と胃止痛をはかるとよい。

◇鍼も薬もない場合は，両手の母指でそれぞれ章門を按压するとよい。3回強く按压した後に1回軽く按压する，これを何度もくり返すと，理気止痛の効を取めることができる。間使を配穴して按压してもよい。

④肝胃鬱熱(肝鬱化火して胃に影響したもの)

【主証】脘部の灼熱痛，痛みは急迫。口乾，口苦，口渇して飲む，泛酸，胸やけ，飲食減少，煩躁，怒りっぽいといった症状を伴う。舌質は紅，舌苔は黄，脈は弦または弦数となる。

【治則】疏肝瀉熱，清胃調中

【取穴】行間，内庭，足三里（瀉）

⑤瘀血停滯(気滯が長期化して瘀血内結したもの)

【主証】胃脘痛，痛みの部位は固定，刺痛，局部拒按。黒い大便が出たり，嘔血したり，食後に痛みがひどくなったりする。舌質は紫暗，脈は澀または弦澀となる。

【治則】活血去瘀，理気止痛

【取穴】膈俞，三陰交または間使（瀉）

【応用】顔色が蒼白で頭目昏眩が見られ，舌質淡で脈細であるものは，間使，三陰交（瀉）で行気活血をはかると同時に，中薬を併用して調営斂肝をはかるとよい。

⑥脾胃虚寒

【主証】胃脘部の隠痛，さむがり，按じると痛みは軽減する。飲食減少，消化不良，水様の涎を吐く，精神疲労，無力感。ひどい場合は手足不温となる。大便は泥状。舌質は淡，舌苔は薄白，脈は軟弱または弦細となる。

【治則】温中健脾，散寒止痛

【取穴】

◇中脘（灸瀉），神闕，関元（灸）：温陽益脾，暖胃止痛

◇脾俞（補），中脘，足三里（灸瀉）：温中健脾，散寒止痛

応用

◇胃痛が長びいたり，破気散滯の作用をもつ薬物を長期に服用していると，正気が衰えて胃痛が治らなくなる。このようになると空腹時に胃痛が起こり，食後に痛みが軽減するようになる。さらに息切れ，懶言，精神疲労，倦怠などの症状を伴うようになる。顔色は蒼白となり，脈は沈細または虚軟となる。胃腸管バリウム造影検査で器質性病変が見られないものには，合谷，足三里（補）で益気健中をはかるとよい。強く補うと滞りが生じる可能性がある場合や，虚中挟実である場合は，間使（瀉）を加えて理気をはかったり，中脘（瀉）を加えて和胃止痛をはかるとよい。あるいは足三里を先瀉後補の法に改めてもよい。脾俞，胃俞〔補〕，中脘，神闕（灸）により健脾養胃，助陽温中をはかったり，胃俞，足三里，中脘（補）により健脾養胃，培土健中をはかってもよい。

◇胃気がひどく虚して胃の機能が減退し，抵抗力が低下し，寒に偏った飲食や熱に偏った飲食，あるいは辛酸に偏った飲食をとると胃痛を誘発するものがある。このような場合には宋代の王執中の「人は胃気を仰ぎて主と為す」「脾胃の壮なるを欲すは，当に脾胃俞に灸すべきなり」の説にもとづいて，脾俞，胃俞（灸）により健壯脾胃をはかるとよい。

原本『鍼灸臨床弁証論治』 李世珍 著 人民衛生出版社

訳本『臨床経穴学』 李世珍 著 東洋学術出版社より抜粋